

**radical であることと rootless であること**

石井 潔 (静岡大学)

(1) 「ラディカリズム」と「生き残りのイデオロギー」

ラディカリズムは、歴史的にはまず 18 世紀から 19 世紀にかけての市民革命の進展に伴う参政権拡大運動を意味した。封建的な身分制的社会体制を変革し基本的人権の保障を勝ち取る上で、より広い社会層の代表権を獲得することが出発点となることは当然である。しかしこのような「根本的 (radical) な」変革を求める運動に対しては、常にそれは歴史的な智慧に学ぼうとしない「根拠を欠く (rootless)」ものにすぎないのではないかという批判が投げかけられてきた (パーク『フランス革命についての省察』)。民衆の無秩序な「意見 (opinion)」によって支配される社会よりも「慣習的智慧 (prejudice)」に導かれる社会の方が健全だという主張である。

確かに「哲学的ラディカリズム」と呼ばれるベンサム的な「最大多数の最大幸福」原理においては、多数決による決定の前では基本的人権ですら「無意味な誇大妄想 (nonsense upon stilts)」とされるのであるから、橋本=安倍的な「多数がすべて」の悪しき実例を日々目の当たりにしている我々にとって、「選挙で勝てば何をしても許される」という意味でのラディカリズムよりも、歴史的反省の上に立って日本国憲法を尊重しようとする保守主義的な智慧 (立憲主義) の方に肩入れしたくなるのも無理はない。またフランス革命には否定的であったパークの保守主義が、同時に東インド会社によるインド支配に対しても批判的スタンスをとるものであったことを思うとき、帝国主義的世界秩序への抵抗の一つの姿をそこに見ることも見間違いとは言えないだろう。

しかしラディカリズムが「根拠を欠く」無定見なエゴイズムと他者支配に転化するのには、それが基本的人権をはじめとする普遍的な価値や社会と歴史についての客観的認識に基づく民主的な意思決定プロセスを投げ捨て、それぞれの個人や彼/彼女が所属する集団の「生き残り」のみに目を向けるようになる時である。シンガポールを代表する劇作家郭宝崑は、『宦官提督の末裔たち』のなかで、あらゆる意味で rootless な鄭和 (彼は男根を欠き、色目人のイスラム教徒として漢民族支配の下で民族的・宗教的ルーツから切り離され、絶えず航海を続けるよう皇帝の名を受けたことによって特定の土地に根をはることも許されていない) によってシンガポールとその国民を象徴させる。「マレー人の海」のなかに位置する中国人優位の小社会が「生き残り」のためには、積極的に rootless な存在となることを選び取り (母語を捨てて国際言語としての英語を選び取り、多文化主義を国是とし、伝統的村落を破壊しポストモダンの景観をもつ都市国家を建設する)、激しい競争にさらされる国際市場のなかで勝ち続けるしかないという李光耀の radical な信念に基づいて創造

されたこの人工的な国家においては、政治的独裁も社会的格差も（「バッファー」と呼ばれる）外国人労働者差別も、すべてこの「生き残りのイデオロギー」によって正当化される。

反体制派と見なされ投獄経験もある郭宝崑は、この戯曲を「市場が私を呼んでいる」という鄭和の叫びによって閉じることによって、「生き残り」を賭けて資本主義的な世界秩序へと主体的に自らを投企しようとする同胞たちの姿を描き出そうとしたと言ってよい。そしてこのような自己投企もまた、非常に極端な形ではあるが、市民革命的なラディカリズムの必然的な帰結の一面であることは事実なのだ。しかしここには、特殊な個人や集団の「生き残り」という狭い価値観を越える普遍的価値や多様な意見に基づく民主的な意思決定といったラディカリズムのもう一つの側面が欠けている。ラディカリズムが保守主義者の言うような rootless なものに転化しないようにするためには、この後者の側面に目を向けなければならない。

## （２）ラディカリズムの条件

市民革命的ラディカリズムが同時に資本主義化を押し進めるものである以上、そこにはもともと、伝統と共同体的秩序を乱暴に破壊して人々の間の競争をあおり、利益と市場を求めて対外膨張を繰り返す「暴力と抑圧」という側面が備わっている。マルクスが言うように、「我が亡き後は洪水よ来たれ」という自分たちの「生き残り」のことしか考えない歴史的責任とは無縁な刹那主義がラディカリズムには常につきまわっているのである。封建的秩序という過去のしがらみにとらわれることなく無制約の市民的自由を謳歌しようとするラディカルな主体は、こうして rootless な存在となる。

しかし市民革命が同時に基本的人権を共有する市民という新たな連帯の形をつくり出し、科学的知識の発展及び教育とジャーナリズムの普及を通じて啓蒙された市民による「公論」による社会的意思決定への道を開いたことも確かである。そしてこのような基本的人権の拡張と「公論」による決定という道を極限まで突き詰めるという意味でのラディカリズムには、市民的連帯を階級的連帯へと高め、資本主義的な「暴力と抑圧」を克服するような根本的な社会変革を生み出す可能性が開かれている。

後藤道夫は「階級と市民の現在」（『モダニズムとポストモダニズム』青木書店1988所収）において、戦後の市民主義の系譜のなかで、能力主義的競争と帝国主義支配に反対し、永久革命としての民主主義の徹底化を求める「市民主義ラディカル」の潮流（丸山真男や日高六郎）と高度経済成長によってもたらされた「豊かさ」を無批判に肯定し（「安楽への全体主義」藤田省三）、「私生活主義」と「自己責任論」を受け入れ、国内外の資本主義的「生き残り」競争の論理に回収されていく潮流との間に境界線を引く作業を行った。前者に代表される「良質の近代」を引継ぎ、

《シンポジウム》  
「ラディカリズムの条件——窮迫する時代を見据えて」

後者のような「悪しき近代」を克服する運動としてのマルクス主義的ラディカリズムの立ち位置を明確にする上で、この後藤の作業は基本的な参照点となる。

またこの両者の関係は、マルクス主義内部でのアルチュセールの生産関係主義的潮流と科学技術革命論的な生産力主義的潮流との関係ともパラレルである。「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」という共産主義社会の目標を、あふれるばかりの生産力の獲得というはるかな未来の時点へと先延ばしする生産力主義的マルクス主義は、「現存社会主義国」の実態が如実に示しているように、「今ここ」における能力主義的競争・支配を肯定する思想となりかねない。人々の「必要＝ニーズ」に第一義的な価値を置き（新福祉国家構想を新自由主義批判の基軸に置く後藤の指摘はこの点でも重要である）、このような立場から市民革命と近代化がその内部にはらむ資本主義的「暴力と抑圧」を根底から覆すことをめざす生産関係主義的変革の展望をもつ時にはじめて、マルクス主義は真の意味でラディカリズムと呼ばれるに値するものとなるのである。